英語・日本語に共通する「女言葉に反映される女性観」
－ ‘Politeness’ との関連性 －

今 西 佑 子

1 はじめに

日本語では　1人称の呼び方や終助詞の使い方など、男性と女性では　言葉そのものの使い方が違うことは周知の事実である。

英語でもやはり、女性の言葉使いに男性と異なる点がみられる。

古くには　O.Jespersen（1922）が著書 *Language* で‘The Women’の章を設け、女性の言葉使いの特徴を挙げている[1)]。

それらには女性差別的な思想があらわれていると批判された。

近年、言語が実際の社会の中で具体的にどう使われているかを探ろうとする社会言語学の発展と共に、社会言語学的見地からの女性の言語行動の研究がよくされるようになってきた。

その発端となったのは、Robin Lakoff（1975）の *Language & Women's Place* であり、その中で Lakoff は「女言葉は劣ったものであり、社会における女性の低い地位の反映である。」と主張した。また、Lakoff は女性を表す言葉には女性差別的な思想が存在することも指摘した。

その後、Lakoff の主張に対して、Dale Spender（1980）が、*Man Made Language* で、Lakoff への反論を試みたのを始めとして、今日まで様様な研究がされてきている。

それらはアメリカで起こったフェミニズム運動とも相俟って、アメリカでは言語改革運動が起こり、女性に不利と思われる言葉が次々と変えられていった。

言葉はまさに社会を反映したものであり、女性の言葉には女性の社会における位置が表れている。言語の普遍性という観点からそれらを考えてみる時、英語における「ことばにあらわれる女性観」は日本語においても共通点が見られるのではないだろうか。さらに本稿では、‘Politeness’との関連性も、考察する。

2 男女を形容する言葉に表れる女性差別的思想

2．1女性に関する言葉

Lakoff は女性に関する言葉自体に女性差別的な思想が存在することが表れていると指摘したが、日本語においても同様であることが指摘できる。

1）woman（女）という言葉自体に含まれる差別思想

Lakoff によれば、lady は元来 woman の婉曲表現であって、意義上でも文脈上でも同じ使われ方をしない。例えば、cleaning lady や sales lady と言うが、lady doctor とは言わず、woman doctor と言う。Lakoff は次のように説明している。「医者は医者という職業上の威厳を十分持っているから、婉曲表現でおだてあげてもらう必要がない。一方、掃除婦はその職業柄、せめて、ことばの上だけでも格上げが必要なのである。」（pp.24－25）

つまり、woman という言葉自体に女性差別的な思想が存在することがわかる。

又、女の医者の場合だけ、わざわざ woman doctor と言う。

日本語においても、まったく同様で、女医とか女流作家、女社長とかいう。まるでそれらが男の仕事であるといわんがごとしである。

又、woman という語には性的意味合いを伴っていると Lakoff は次の例文をあげて説明している。

a）She's only twelve, but she's already a woman. (＊lady)

b）After ten years in jail, Harry wanted to find a woman. (＊lady)

c）She's my woman, (＊lady), see, do not mess around her.

従って、lady が woman の婉曲表現として機能する理由を Lakoff は「性的含蓄を伴っていないから気恥ずかしさが無いためであろう。」としている。

同様のことが日本語における‘女’と‘女性’という語に当てはまる。上のa）b）c）3つの例文で woman を女性と訳すことは適当でない。やはり、女と訳すべきである。つまり、‘女’という語には woman と同様に性的な意味合いを伴っているのである。

2）女を未熟なものとして扱う

男が主役で女が脇役という思想の表れとして、男の秘書には man を使い、boy を決して使わないのに、女の秘書には woman や lady ではなく、girl が使われる。Lakoff はその理由を次のように述べている。(p.25)

> .... : in recalling youth, frivolity, and immaturity, girl brings to mind irresponsibility : ..... : a woman is a person who is both too immature and too far from real life to be entrusted with responsibilities and with decisions of any serious nature

日本語においても同様で、大人の一人前の女性が会社で働く場合、上司などからよく、「うちの女の子が•••」という言われ方をする。

3）女を男の付属物のように扱う

男は一生 Mr. でいいのに、女は Miss から Mrs. に変わらねばならない。(現代では feminist たちの運動の結果、Ms. という語も市民権を得ているが)

日本語では直接 Miss, Mrs. に当たる言葉はないが、結婚すると‘〜さんの奥さん’と呼ばれるようになり、自分本来の名前で呼ばれることが少なくなってしまう。

又、夫婦関係は主従関係ではないのに、夫のことを‘主人’と呼ぶ。手元の、新和英中辞典をひくと、‘主人’の項目で最初に出ているのが、‘家長’で、the master (of a house) となっている。

現代では男も女も結婚しないで一人で生活することも稀ではなくなったが、その際、男に対しては軽蔑的な言葉はないのに、女には‘売れ残り’、‘貰い手が無い’などの軽蔑的な言葉が投げつけられる。英語の bachelor と spinster で、spinster にだけ軽蔑的な意味合いがあるのと同じである。さらに、離婚した女性のことを‘出戻り’というが、男にはそれに当たる言葉はない。

これらは、女は男に養ってもらわなくては生きていけなかった過去の時代の思想からきていると思われ、女性を一人前の人間として扱っていないことの表れであり、女性を見る目に、さげすみの気持ちが感じられる。

4）女を性的対象物として扱う

女性を性的な意味合いで軽蔑的に指す言葉は英語、日本語共に数多くある。例えば、bitch（メス犬）、whore（売女）、slut（身持ちの悪い女）、tramp（あばずれ）などである。

それらの言葉の背後にあるのは、性道徳を女性のみに要求しているということである。

2．2　男女を形容する言葉の違い

1）辞書に表れる女性差別的思想

言語学者のD．Cameron（1985：82－83）は「辞書も明らかに性差別的である」と言い、女について数多くの劣悪で不快な定義を記載している。と述べている。

日本語においても同様で、三一書房の『国語辞典にみる女性差別』（1985）によれば、日本語の5つの辞書からそのような語を拾ってみると、全部で109語あるということである。109語中、90語は‘遊女’等も含め、不特定男性との間に金銭の介在する性を営む‘売春婦’であり、残り、19語中、過半数は‘妾’に関する語である、とのことである。(p.104)

この本によれば、国語辞典に載っている用例のうち‘男’、‘女’を規定する形の用例を拾い出してみると、用例に男を使った言葉は人物評価に関するものが多く、性に関するものは1例しかないのに、女を用例に用いた言葉としてはイメージ、容貌、性に関するものが多いということである。例えば、男の場合は‘気骨ある男’、‘屈強な男’といった人物全体を評価する言葉の用例として用いられるが、女は‘まるぽちゃな女’、‘かわいい女’、‘うつり気の女’、‘淫蕩な女’などのように女の人格は問われない、ということである。

2）諺などに表れる女性に対する決め付け

Many women many words. という諺があるが、同様に日本語には‘女三人寄ると姦しい’という諺がある。この姦しいという漢字そのものに表れているように、女はおしゃべりでうるさい、という通説は洋の東西を問わないようである。又、日本語には‘井戸端会議’という言葉があり、つまらないゴシップなどは女の好きなものと考えられているが、これも英語の世界でも同様に考えられている。反対に男は無口なものとされているが、女性が男性よりもおしゃべりだという証拠は今までに何もあげられていないように思われる。実際に、言語学者のChris Kramaraeによる *Women and Men Speaking*（1981）の調査では、男女混声では男の方がスピーチ時間が長かった、という結果がでている。

又、A woman's mind is always mutable.（女心と秋の空）など、女性をけなした諺は数多く見られる。

寿岳章子（1979）の「日本語と女」によれば、日本人は他人にレッテル貼りをする傾向が著しく、女に対する数多くの決め付け語がまかり通っているとし、それらは一般に女は無能力であり、男より劣るという大前提に立っている、と述べている。(pp.137－143) そして、彼女は次のように言っている。

> 考えてみれば、女という存在は変なものだ。総論としてはだめの二流で、そして一人の個人が何か失敗をしでかすと、やはり女はだめですというふうに言われる。どんなにすぐれた業績を出そうと、それは「女とは思えぬ」という一個人の領域につっこまれ、しそこなった時は女全体に拡散される。男は失敗した時、男だからだめなのだとは絶対に言われない。あいつはだめだというように、個人の責任にされてしまう。まったく評価の方向が別なのである。(p.143)

以上のことからも、女性はやはり、ひとりの人間として男性と対等に扱ってもらえないことがよく分かる。

アメリカでは男と女は違う、という思想の表れとして、男らしさの信仰（Cult of Masculinity）があり、sissy（女々しい）という言葉が男らしさの反意語である、ということを、国引正雄（1975）が『現代アメリカ英語』の中の“女々しさは嫌われる”という章の中で sissy の１つの例としての泣くという行為を Ashley Montagu の *The American Way of Life* からの次の引用で説明している。（p 33）

> American men don't cry because it is considered Unmasculine to do so..
> Only sissies cry. Crying is a “weakness” character of the female.（p 243）

ここでも、男は強くてすぐれているのだ、女は弱くて駄目なのだ、という思想が表れているように私には思われる。

以上述べてきたように、女性が社会において差別的に扱われてきたことが言葉の上からも言える。では、そのような差別思想が女性の言語行動にどのように反映されているのか又、女性の特質がどのように表れているのかを、主に Politeness との関連性から次にみてみたい。

3　女性の言語スタイル

3．1　特徴とその原因

1）断定を避けようとする

女性は断定したり、真正面からものを言うと男みたいと思われてしまうのではないかという不安から、相手やまわりに気を使って和らげた表現を使うことが多い。

断定文の前に I think, I guess 疑問文の前に、I wonder をつけたり、well, you know, kind of というような表現を使う。Lakoff はこれらを hedge word「かきね言葉」とよんでいる。

日本語でも同様の理由から強い断定の響きがある「～だぞ」という語尾は男の言葉とされ、「～かしらねえ」といった相手に同意を求めたりする言い方をする。

同様の理由から、女性は上昇調イントネーションを好むとされるのも、共通の傾向である。

2）甘い形容詞や大げさな副詞を好む

女性はcute, lovely, などの甘い感情的なニュアンスの濃い形容詞を好んで使う。

これらに関しても日本語の場合も同様である。「かわいい」、「すご～い」などは女性がよく使う言葉である。

3）標準語指向である

女性の方がより正しい文法、発音で話そうとする。Peter Trudgill（1974：85－86）の Detroit での調査によれば、女性は社会のどの階層においても非標準的な多重否定（ex.. I don't have nothing.）を使用する比率が少ない結果がでている。

又、別の［～ing］の発音調査でも、同様の結果が出た。女性は［g］を省略して発音しない。

Trudgill によれば、“Women try to compensate for their subordination by

signaling status linguistically" であり、女性の特質としての「正しさ」が重要な働きをなすためであろうと考えられる、としている。

4）タブー語、罵り語、俗語の使用が少ない

男性は Shit！, Damn！, Hell！ などの強い間投詞を使うが、女性はかわりに、Oh, dear, goodness などのやわらかい間投詞を好む。又、きわどい表現や、罵り言葉もあまり使わない。

これらのことは全て日本語にも当てはまり、女性は「ばかやろう」「くそったれ」などの言葉を普通は使わない。

3．2　女言葉を支配する Politeness

以上の1）～4）までについて言える事は、すべて女性には丁寧な言葉を使うのが常識とされてきたからと思われる。それは洋の東西を問わないようである。Lakoff は、女性は幼児のときから小さなレディのような話し方を仕込まれるからだとしている。

日本語の場合は、やはり、男の方が女より立場が上、という考え方に従来から支配されてきたので、女性は男性に対して、へりくだったものの言い方をする傾向があるし、男から女へより、女から男への方がより敬語の使用が多い。反対に男は女に対して、いばったものの言い方をする傾向が強い。

では、次ぎに、そういう言葉を支配している Politeness との関連性を考察したい。

4　Politeness との関連性

4．1　Politeness の意味するもの

Janet Holmes (1995) は *WOMEN, MEN AND POLITENESS* で What is Politeness？ という項目をあげ (pp. 3 － 6)、Being polite means expressing respect towards the person you are talking to and avoiding offending them. と述べている。Holmes はさらに、もっと広い意味で Politeness に、相手に対する積極的な心遣い、すなわち善意と親愛の気持ちをも含めている。

日本語では、ていねい表現は古くからの日本の社会秩序のあり方からみて、基本的には縦の人間関係を維持させるためのものであると思われる。その意味からも女性の方がへりくだったもの言いであり、ののしり語や命令語を使わないことが納得できる。又、女性にていねいな敬語表現を求めているということは、女性に控えめな態度を求めているということである。

Lakoff が挙げている、hedge words (you know, I think, a sort of など) は Holmes によれば polite な表現で、相手からの協力や応答を確保するなどの重要な役割を果たす語句としている。

4．2　Politeness の2つの戦略

Holmes は politeness には、大きく分けて、2つの言語行動があると言う。1つは positive な politeness で、具体的言語行動は compliment であり、もう1つは negative な politeness で、

具体的言語行動は apology である。

さらに、Holmes はどちらの言語行動にも男女の違いがみられることを調べた。

それらはどのように違うのか、そしてそれはどのような理由によるのかを次ぎにみてみたい。

1) positive politeness (compliment)

Holmes が New Zealand で誉め言葉の男女差を調査した結果、Women gave and received significantly more compliments than men did. (p.122) であった。そして、同様の結果を他の研究者たちも報告している、としている。さらに、書き言葉においても女性のほうが男性より、誉め言葉の使用が多いという結果がでている。

又、何について誉めるのかという、誉める内容についても興味深い結果がでている。女性は appearance について最もよく誉め、一方、男性は appearance も誉めるが、女性ほどではなく、possesions について誉めるというのが女性との大きな違いである。(pp.130-132) 女性は possession を誉めるのは相手を傷つけるのではないかと思い、一方、男性は appearance を誉めるのが気恥ずかしいと思うらしい、と Holmes は述べている。

さらに、アメリカの男性の間では見た目を誉めるというのは、非常にまれであり、非常な big face-threatening (面子を失わせるような) 行為だと Wolfson (1983) も述べている。さらに、ホモセクシュアルの汚名をきせられる恐れもあるということである。(p.133)

Holmes は compliment の捉え方が女性と男性とでは違うのだと言い、女性は感情的なものと捉え、連帯、共有的な表現と捉えている。一方、男性は face-threatening かどうかで解釈している、と述べている。女性は自分の意見を述べにくい、人と違った意見を述べて、孤立したくない、という気持ちになりがちだからではないだろうか、と思われる。

さらに、Holmes は男性が女性を誉める時には、社会における女性の従属的な地位が反映されていると次のように述べている。(p.153)

> It also seems possible that the way men use compliments to women, in particular, may reflect the subordinate status of women in the society generally. Like endearments, compliments gain their force from the context of the relationship in which they are used. When used non-reciprocally by superiors to subordinates, these may underline patterns of societal power which place women in a clearly subordinate position to men.

Holmes が述べているように、compliment が男性から女性に使われる場合には、女性を男性に対して劣った地位に置く社会的な力をはっきりと示す、のである。

2) negative politeness (apology)

Holmes は apology を negative politeness device と捉え、次のように述べている。An apology is a polite speech act used to restore social relations following an offence. (p.154)

Holmes が New Zealand で行った調査によると、New Zealand の女性は男性よりも、より頻繁に謝ったり、謝られたりしている。(73 per cent versus 8.5 per cent) (p.158)

このことは、Holmes が行った、謝る内容に関する調査にも関連があるかもしれない。女性は男性よりも、よりたやすく謝る。又、謝る内容も軽い事柄に対してであり、男性が謝るのは重い事柄に対してである。(p.172)

なぜ女性の方が軽い内容であっても、よく謝るのだろうか。Holmes は男と女では謝るということに対しての考え方が違うからだと言い、次のように述べている。(P.184)

> Men may give more weight to their function as self-orientated face-threatening acts, damaging the speaker's face. － and therefore to be avoided where possible. Women by contrast may perceive them primarily as 'other-oriented' speech acts aimed at facilitating social harmony.

女は同じ不快さに対しても男とは違うウエートを置き、謝罪の必要性の課し方も違うのである。それは女性の方が自分よりも周りの調和に重きをおくからである。

3）まとめ

日本語では、ていねい表現の体系は英語より、より込みいったものである。尊敬語、謙譲語、丁寧語と三種類あり、しかもその使い方には上下関係、年長者、親子など色々な場面で使い分けせねばならない。

一般的に言って、ていねいである、ということは好ましい資質であると考えられる。女の言葉使いが丁寧であるということは、女言葉が劣ったものである、という Lakoff などの主張が間違っている、とも考えられる。

しかし、なぜ女性が丁寧な言葉使いをするのか、しなければならないかを考えるとき、やはり女性の置かれた立場が低いからであり、Dale Spender のいうように「言語そのものが男によって、男の都合のいいように作られ、言語のルールも男によって支配されてきた。言語の中の性差別が現実の性差別を引き起こしている。」との主張もうなずける。

いずれにしても、英語と日本語では女言葉への評価は必ずしも一致しているとは言えない。それは、いわゆる'女らしさ'への評価が必ずしも一致しないからではないだろうか。日本の社会では欧米社会よりも女性の持つ'上品さ'、'丁寧さ'などは好ましいと考えられているように思われる。しかしながら、それらを女性に押し付けている、という点に関しては日本の社会のほうが欧米の社会よりも強いのではないだろうか。

5　おわりに

ここ30年ほどの間にアメリカで起こったフェミニズム運動などによって、女性の地位もあがり、それに伴って、実際に言語改革も起こり[2)]、差別的な言葉使いなども減ってきている。

日本語もその流れを受け、たとえば、保育園などで働く男性職員が「保父」という名前だったのが、男女の区別なく「保育士」に統一されるようになった。看護士、も同様である。

又、特に若い世代では脱性差化の傾向もあり、女性自身の意識も変わり、いわゆる女らしい言語行動も以前に比べると、少なくなってきている。この点においても英語の世界も日本語の世界も同じである。さらに、それに対しての反応の仕方も共通している。アメリカの年配の友人は若い女性が"dirty language"を使うと嘆き、自分が若い頃には'shit''fuck''hell'など、いわゆる"4 letter words"などは決して使わなかった、と女性の言葉使いの変化を好ましく思っていない。

しかしながら、若い友人は swear words を使うことに対して、"Now, if women swear at the office, they seem to be more respected, as though that's what it takes to be taken

seriously." と言って肯定的である。

同様に日本でも、年配の人たちには若者の言葉が乱れていると映るようであり、特に若い女性が男のような言葉を使うことへの拒否反応は強いようである。

言語はそれのみで存在できないし、社会の変動と共に変動していくものと思われる。21世紀になり、今後女性の言葉の変動がどういう方向に向かっていくのかを注目していきたい。

注

1) Jespersen は *Language* のXIII章 'The Women' (pp.237-254) で、女性語の特徴として次の諸点をあげている。

1 Women are more conservative than men. (p.242)

2 Women will invent innocent and euphemistic words and paraphrases, which sometimes may in the long run come to be looked upon as the plain or blunt names, and therefore in their turn have to be avoided and replaced by more decent words. (p.245)

3 The vocabulary is much less extensive than that of men. (p.248)

4 Women use 'pretty', 'nice', 'vast', 'vastly' and 'so (more extensively than men. (pp.249-250)

5 The volubility of women has been the subject of innumerable jest. (p.253)

6 Their vocabulary is smaller and more central than of men. (p.253)

Jespersen は、これらを実際にデータをとって調べたわけではなく、小説などからの例をあげて、男女差別主義者の仮定を無批判に受け入れている、という批判にさらされた。

2) ホノルル市女性の地位委員会政作 Do's and Don't's for Non-sexist Language (1988) より

Anchorman → anchor, anchorperson

fireman → fire fighter

mankind → human beings　など

主な参考文献

1. Janet Homes, *WOMEN, MEN AND POLITENESS*, LONGMAN (1995)
2. R. Lakoff, *Language and Woman's Place*, Harper & Row, Publishers Inc., New York (1975)
   かつえ・あきば・れいのるず訳 『言語と性』 有信堂 (1985)
3. D. Spender, *Man Made Language*, Rouledge & Kegan Paul, London (1980)
   れいのるず＝秋葉かつえ訳 『ことばは男が支配する』 勁草書房 (1987)
4. P. Trudgill, *Sociolinguistics*: An Introduction to Language and Society, Penguin Books (1975)
5. O.Jesperson, *Language*: its Nature, Development and Origin, Allen & Unwin (1922)
6. 寿岳章子、"日本語と女" 岩波新書 (1979)
7. 言葉と女を考える会編、"国語辞典に見る女性差別" 三一書房 (1985)